

幕府領肥後国天草郡の石炭史料

松下, 志朗
九州大学経済学部

<https://doi.org/10.15017/13545>

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 1, pp.11-12, 1973-05-08. エネルギー史研究会
バージョン :
権利関係 :

幕府領肥後国天草郡の石炭史料

松下 志朗

近世における天草の石炭史については、その具体相を殆んど知ることができない。

『天草の歴史』は、享和年間志岐村の山火事で石炭が焼え出したこと、又天保年間には魚貫村で田島屋久兵衛が採掘に従事していたことなどを記しているが、その比重は比較的軽いようである。

天保二年の「肥後国八代郡卯御年貢割附」(旧高浜村庄屋上田家文書)をみると、天草郡の年貢米一二、六八一石余と銀一貫五四〇目余を納付しているが、その中で石炭役の運上銀は僅か三〇目にすぎない。時代が下ってもその事情はさほど変わらないようである。天草無煙炭の主要埋蔵地は下島西部一帯であるといわれているが、その地域の大江組の「諸運上物並農間諸稼其外書上帳」(旧福連木村庄屋尾上家文書)をみても、慶応三年の時点で都呂々村の石炭山運上は銀八匁五分、今富村が七匁二分(いずれも五ヶ年季)でしかなく、砥石山運上や焼物関係の運上に比べてはるかに少い。

しかし、この運上銀が小額であることは、当時の石炭需要の様相を示すものではあっても、天草石炭の質や埋蔵量を反映するものではない。『筑豊石炭礦業史年表』の「全国石炭関係」欄に散見するだけでも、安政四年一月に長崎海軍伝習所のカッティンディーケが天草石炭に注目しており、また文久元年には志岐村採掘の石炭二五万斤が肥後高瀬表へ積み出されているのである。(外に元治元年

七月二十三日の項も参照)

ところで、ここに紹介する記事は表紙欠の「手鑑」より抜書したものであるが、年代も記入されていず、また書き上げている村も志岐組と久玉組のみで肝心の大江組が欠落している。しかし大江組について、前述したところと合わせて考えて頂ければ、一応幕末期における天草郡の石炭採掘の状況を知ることができるとはなからうか。

なお、この史料の他の所で村高・家数・人別を村毎に書き上げており、それを他の手鑑や人高竈数書上帳等で比定すると、ここに採録した史料の年代は安政四巳年前後のものと考えられる。

(仮題)

「手鑑」

(幕府領) 肥後国天草郡大江組福連木村庄屋

(尾上家文書 No20)

志岐村

巳より西迄五ヶ年季

一石炭山式ヶ所

此運上銀三拾目式分

字舛の水 壹ヶ所

隊人
(甚三郎 利兵衛)

字藏付 老ヶ所

甚三郎

内田村

試問堀当三月六月兩度ニ願出ル

一、石炭山式ヶ所

字長迫 老ヶ所

//大藪 老ヶ所

庄太郎

上津深江村

当五月間堀願出ル

字小平

一、石炭山老ヶ所

当時休

国照寺除地

年柄村

寺へ運上納

一、石炭山式ヶ所

此役銀拾五匁

稼人

内 井手平 老ヶ所

井手平 老ヶ所

未タ不取掛

庄松

魚貫村

一、石炭山五ヶ所

丑より巳迄五ヶ年季

浦越 老ヶ所

此運上銀拾五匁

字むかひへた老ヶ所

字中の浦 老ヶ所

字船かくし 老ヶ所

当時間堀願出候分

字鷺ノ巣 老ヶ所

当時間堀願出候分

丈松

巳より酉迄五ヶ年季

字米例

一、石炭山老ヶ所

此運上銀拾五匁老分

外

字なかへた 当時止メ

吉藏

牛深村